

# 第 1 章

## 古代ギリシアにおける「他者」の発見と 「他者」との境界をめぐる言説の展開 —ヨーロッパという境界の策定の歴史的展開と 近代における受容をめぐる

師 尾 晶 子

### 目 次

はじめに

1. 古代ギリシア人の境界意識
2. ギリシア人とバルバロイ（異民族）という対比の誕生
3. 小アジアをめぐるアケメネス朝との攻防と異民族敵視，異民族蔑視の言説の普及
4. 異民族=敵としてのマケドニアという言説
5. アレクサンドロスによるギリシア人と非ギリシア人の区別
6. ヘレニズム時代：ギリシア人の領域の拡大とバルバロイの領域の遠隔化
  - 6-1 敵としてのケルト人
  - 6-2 敵としてのマケドニア人再度
7. 戦争を契機に再生される異民族蔑視の思想と異民族敵視の思想
8. むすびにかえて EU の拡大・EU の境界-異民族蔑視，異民族排除の境界は再び生ずるのか？

## はじめに

本論文は、古代ギリシアにおける「他者」の発見と「他者」をめぐる言説の展開に焦点をあてる。

古代ギリシアにおける「他者」言説、異民族蔑視の視線が近代ヨーロッパの帝国主義、植民地主義の思想の形成に利用されてきたことは、サイードの『オリエンタリズム』の公刊を契機に注目を集めるようになり、以後、数多くの論考が出されてきた<sup>1</sup>。「他者」に対するネガティブなイメージすなわち異民族蔑視の言説は古代ギリシアで生みだされた、と一般に解釈されるようになったのである。1989年に Edith Hall, *Inventing the Barbarian* が出版され、ギリシア悲劇に見られる異民族蔑視の視線とその経緯があざやかに描き出されると、異民族蔑視の言説がペルシア戦争後に誕生したこと、そこに見られるギリシア中心主義・アテナイ中心主義の見方と近代西欧におけるヨーロッパ中心主義の見方との類似性にあらためて関心もたれるようになった<sup>2</sup>。Edith Hall のこの著作は、ギリシア人の異民族観研究の基本書となり、古代ギリシア人の他者認識の中に異民族蔑視の思想が含まれていると言うことが以後の議論の出発点となっていった。さらに Jonathan Hall は、ペルシア戦争の体験が、ギリシア人のアイデンティティを形成し、ギリシア人と異民族とを対比的にとらえる思考を生みだしたと述べた<sup>3</sup>。また Ian Malkin は、民族差別の思想の起源が一般に古典古代にあると指摘した<sup>4</sup>。

筆者は現在、古代ギリシアの碑文のなかで異民族を指し示す用語 *barbaroi* およびその関連語がどのように用いられているかについて網羅的に調査した論文を別稿で準備中であるが、その中で、碑文にかかわらず、文学その他の分野においても、他者言説をめぐる研究において強調されてきたほど、*barbaroi* という語がつねに偏見を伴った語義をもつものとは限らないことを確認した。また、*barbaroi* という語が異民族蔑視あるいは敵愾心を伴って用いられるのは、当該異民族との間に緊張関係が存在する特殊な状況下におかれているときに限られていることを見いだした<sup>5</sup>。古代ギリシアが二項対立的な思考法を生みだし、これによって「自己」と「他者」を区別して考える論法を発展させたことはちがいない。

1 Said (1978). サイードの問題関心の中心は、ヨーロッパ中心史観による「オリエン」の創造であった。彼は、ヨーロッパ対アジアという対比、ヨーロッパにとっての「他者」としてのオリエン・アジアというステレオタイプな見方の起源を古代ギリシアに求めた。

2 E. Hall (1989).

3 J. Hall (2002).

4 Malkin (2004).

古代ギリシアにおける「他者」の発見と「他者」との境界をめぐる言説の展開—ヨーロッパという境界の策定の歴史的展開と近代における受容めぐって

ないが、古代地中海世界における異民族蔑視の思想は、普遍化されるようなものでは必ずしもなかった。そうではなく、特殊な歴史的状況下において、繰り返され作りだされ、再解釈され、再創造されていったものなのである。本稿では、異民族蔑視という言説が、新たな「他者」=新たな「敵」に出会うたびに繰り返され、新たな視角をもって強化され、その時の状況に見合った形で変容されつつ、言説の骨子が受けつがれていった状況について考察していきたい。

## 1. 古代ギリシア人の境界意識

ヨーロッパとアジアという地理的な境界の概念を生み出したのは古代ギリシア人であったが、アジアに居住したギリシア人も多数あったことから、地理的区分とは異なる観点からも、彼らはギリシア人というアイデンティティを語っていた。なかでも有名なのが、ヘロドトスの次の一節である。

第一の、しかも最も重大な理由とは、神々の神体や社殿が焼き払われ破壊されたことであり、われわれはこれに対してなんとしても敵に最大の報復を加えねばならず、このような非道を働いたものと和を結ぶどころの話ではない。第二にはわれわれが等しくみなギリシア人同胞であり、血のつながりをもち言語を同じくし、神々を祀る場所も祭式も共通であるし、生活様式も同じであることで (τὸ Ἑλληνικὸν ἐὼν ὁμαίον τε καὶ ὁμόγλωσσον καὶ θεῶν ἰδρύματά τε κοινὰ καὶ θυσίαι ἡθεὰ τε ὁμότροπα), アテナイ人がこの同胞を敵に売るようなことは許されることはあるまい。(ヘロドトス『歴史』第8巻144章2節、訳は岩波文庫、松平千秋訳を引用)

前480年9月のサラミスの海戦でギリシア連合軍が勝利を収めた後、ペルシア軍を率いたマルドニオスとギリシア軍の間で和平に向けた交渉が始まった。引用部分は、このとき仲介の労をとり、アテナイにやってきたマケドニアのアレクサンドロス1世に対して、アテナイ人の代表が和平には応じられないと返答し、その理由を語ったくだりの一部である。

ここには、古代ギリシア人（ここでは古代アテナイ人）が何をもって「ギリシア的

---

5 '«Barbaroi» in Attic (and Greek) Inscriptions' というタイトルで2015年6月15日に Oxford Epigraphy Workshop で口頭報告し、さらにこれを拡大したものを「ギリシア碑文にあらわれる《バルバロイ》の用法」というタイトルで同年10月23日に古代史の会(東京大学)で口頭報告した。これについては、近く論文の形で発表する予定である。

(*hellênikos*)」である、すなわち同胞であると認識したかについて、端的に語られている。すなわち、血縁と言語、宗教、生活習慣の4点の共通性がその条件だというわけである。上述のように、舞台は前480年に設定されているが、ヘロドトスが『歴史』を執筆したのは一般に前430年代とされており、ペルシア戦争後のギリシア世界、とりわけアテナイの言説を反映したものと言ってよい。

## 2. ギリシア人とバルバロイ（異民族）という対比の誕生

古代ギリシア人が自分たちのアイデンティティを語るために対比される存在となったのが、「他者」としてのオリент諸世界、とりわけアケメネス朝ペルシアであった。もともとオリент世界と緊密な関係を持ち、さまざまな文化を受容していたギリシア人は、ながらくギリシア人と異民族といった二項対立的な対比概念を抱くことはなかった<sup>6</sup>。ホメロスの『イーリアス』には、トロイア戦争においてトロイア側について参戦していたカリア人について、「異民族の言語を話すカリア人（*Καρῶν···βαρβαροφώνων*）」と称する一節があるが、ここではギリシア語ではない言語を話すという意味で形容詞 (*barbarophónos*) が使われているのみであり、カリア人が「異民族」すなわちバルバロイであるということ必ずしも語っているわけではない<sup>7</sup>。ギリシア人が、自分たちのことを集団的に「ギリシア人」すなわちヘレネス (*Hellênes*) と称し、ギリシア人以外の民族をひとくりに「異民族」すなわちバルバロイ (*barbaroi*) と称するようになったのは、ギリシア人が地中海一帯に移住し、そこに居住地を建設するようになってからであった。周知のように、ギリシア人自身は統一国家を形成したわけではなく、一つ一つのポリスは独立国家であったが、ポリス的な環境と文化を共有した者たちの間に少しずつ共通の「ギリシア人」としての意識が形成され、それが共有されたのである<sup>8</sup>。それでも

6 アルカイック時代のギリシア世界と東方世界との関係と東方文化の受容と展開については、師尾(2000)、岡田(2008)、周藤(2006)第1章から第5章、およびそこにあげられた参考文献を参照。

7 Hom. *Iliad* 2. 867. トロイア戦争は、ペルシア戦争後、ギリシア人と異民族の戦いの先行例として語られるようになるが、ホメロスの叙述の中には、「異民族の言葉を話すカリア人」という表現に見られるように、自分たちの習俗や言語の相違の存在を意識した表現はいくらも見られるにせよ、トロイア戦争自体を「ギリシア人と異民族との間の戦争」と位置づける見方はない。またしばしば指摘されるように、ホメロスはトロイア人について「バルバロイ」と呼ぶことはなかった。

8 J. Hall (2002).

古代ギリシアにおける「他者」の発見と「他者」との境界をめぐる言説の展開—ヨーロッパという境界の策定の歴史的展開と近代における受容をめぐって

長い間、その区別に優劣の価値観が含まれることはほとんどなかった。

明確な形で二項対立的な思考法がギリシア人の中に生まれ、発展したのは、アナトリアにリュディア王国が誕生し、東方ギリシア人がリュディア王国に征服された前7世紀に入ってからのものであったと思われる。リュディア王国によるイオニアの征服は、ここに住むギリシア人とリュディア王国の人々との接触を密にし、これによっていわゆる「イオニア哲学」が開くことになった。このイオニアの哲学者たちのなかから、二項対立的な思考とその表現方法がうみ出されることになる。イオニアを征服したギュゲス王の富と贅沢、ギュゲス王の広大な支配領域は、ポリスに生活する自身のあり方と対比して十分に衝撃的なものであっただろう。イオニアの哲学者および詩人の言葉の中には、歴代リュディア王の莫大な富について皮肉を込めた形で言及したものがある。たとえば、前7世紀中ごろの詩人アルキロコス<sup>9</sup>は、次のように語る。

黄金持ちのギュゲスの富など気にしない。

私を嫉妬にとらえたことなど一度もない。神々の業であろうと

うらやんだりしない。偉大なる僭主の大権であろうと欲しはしない。

どれも私の目から離れたところにあるのだから<sup>9</sup>。

二項対立的な思考が見られるものの、ここで対比されているのはギリシア人とリュディア王ではない。単純に異民族の王の贅沢について、自身の価値観とは異なるものと謳っている。すなわち、この詩からギリシア人と異民族を対比するという思考法は見てとれない。ギリシアの諸ポリスにおいて僭主政が次々と起こったこの時期の社会にあっては、ギリシア人と異民族を比較する以上に、僭主や王たちのありさまと自分たちのそれとを対比することに目が向けられていた。対比軸は別のところにおかれていたのである<sup>10</sup>。

文献史料から見る限り、*barbaros* あるいは *barbarikos* という言葉に「野蛮な」という意味が時に含まれるようになったのは、ペルシア戦争後のことであった。前480年のサラ

---

9 Archilochus fr. 19 West. アナクレオンの歌謡とされる断片の中にも、同様の一節が含まれている (*Anacreontea* 8)。古典期以降、富や贅沢はバルバロイ的なものと位置づけられ、ギリシアの清貧と対比されるようになる。その事例は、悲喜劇から弁論にいたるまでさまざまな文学作品の中に見いだすことができる。

10 リュディアが小アジアに住むギリシア人を支配下におくと、この地のギリシア人だけではなく、多くのギリシア人がリュディア王と親交を深めることになった。こうした風潮について、好意的にあるいは興味本位にあるいは批判的に評した詩人や哲学者のことばとその含意については、師尾(1999)を参照。

ミス海戦を前にしてアッティカが蹂躪されるという経験を経て、アテナイの作家たちは、ペルシア軍によるこの行為を異民族すなわちバルバロイゆえの蛮行と位置づけるようになった。これにより、*barbaros* およびその類似語に「野蛮な」という意味合いが加わるようになったのである<sup>11</sup>。

後世のステレオタイプなギリシア人の異民族観を示す最古の現存史料は、アテナイで上演された悲劇である。前472年に上演されたアイスキュロスの『ペルシア人』に異民族蔑視の視点が読みとれるかどうかについては、研究者の見解は分かれている<sup>12</sup>。筆者は、サイドや E. Hall のようにこの作品に異民族蔑視、オリエンタリズムの原点を見ることには賛同できない。『ペルシア人』はあくまでも悲劇作品である。アジアの国がヨーロッパに位置するギリシアに攻め入り失敗に終わったのは傲慢のゆえであるとして、この行為が浅慮であったと悔いる文言が登場人物のセリフをとおして何度も繰り返されるが、そこで描かれるのは、人間の奢りがいかに破滅を導くかという主題なのであって、ペルシア人の劣等性やギリシア人の優位を語っているのではない<sup>13</sup>。一方、エウリピデスの表現したステレオタイプな異民族観については、否定の余地がない。エウリピデスは、『ヘレネ』（前412年上演）においては「バルバロイでは1人をのぞいてはすべてが奴隷」（276行）とヘレネに語らせ、『アウリスのイフィゲネイア』（前405年上演）では「バルバロイをギリシア人が支配するのはふさわしいけれど、バルバロイがギリシア人を支配することはふさわしくありません。あちらは奴隷、こちらは自由の民なのです」（1400-1401行）とイフィゲネイアに語らせている。ここでは、ギリシア人とバルバロイとの優劣関係がはっきりと示されている。ギリシア人と「異民族」=バルバロイを対比して、両者の間に優劣を見いだそうとする言説は、エウリピデスの活躍した前5世紀第4四半世紀ころには一般的になっていたと言える。

ギリシア人と異民族についてのステレオタイプな対比の成立については、悲劇とともに、あるいは悲劇以上に、葬送演説や祭典演説が大きな役割を果たしたと思われる<sup>14</sup>。時

11 LSJ の *barbaros* の項でも、I に「異民族、非ギリシア人」と説明した後、II において、「ペルシア戦争後、野蛮な、粗野な (after the Persian war, brutal, rude)」と説明されている。それでも以後も *barbaroi*, *barbaros*, *barbarikos* およびその関連用語に「野蛮な」という意味が含まれる事例は必ずしも多いたとは言えないことについては後述する。

12 Said (1978) はアイスキュロスにオリエンタリズムの起源を見る。また E. Hall (1989) 76-100 もアイスキュロスにその起源を見る。ほかに Goldhill (1988), Georges (1994) 102-109, Gehrke (2000) 85-86, 庄子 (2004) 197-198 など。

13 Griffith (1998) 44-48, Gruen (2011) 9-21。より慎重なニュアンスを持った見方については Mitchell (2007) 185-187 を参照。



の著名な弁論家によって披露されたこれらの演説においては、演説の性格から、戦争の記憶が繰り返され語り、聴衆の間でその記憶が共有され、上塗りされることになった。伝承によれば、ギリシア人が内部で争っていることを憂慮したゴルギアスは、『オリュンピア演説』のなかで、「彼らに心を同じくすること（ホモノイア）を忠言する者となり、バルバロイに関心を向けさせて武器による褒賞はギリシア人相互のポリスではなくバルバロイの領土とすべきだと説得した」<sup>14</sup>。また『葬送演説』においては、「アテナイ人がメディア人やペルシア人に対して奮い立ち、…メディア人に対する勝利を賞賛することに終始し、バルバロイに対する勝利は頌歌をもたらし、ギリシア人に対するそれは哀悼歌をもたらすということを彼らに示した」という<sup>15</sup>。前480-79年の第二回ペルシア戦争から半世紀以上の時を経て、おそらくペロポネソス戦争中に創作されたと考えられるこの演説の中で言及されたペルシア戦争の歴史は、ペルシア戦争を直接体験していない世代の市民にわかりやすく要約された形で伝えられ、そのことがギリシア人、正確にはアテナイ人と「異民族」とのステレオタイプな対比の流布を促すことになった。

一方、先にも引用したヘロドトスは、自著の書き出しにおいて、この書物が「ギリシア人や異民族（バルバロイ）の果たした偉大な驚嘆すべき事績の数々」（第1巻序）を探求するものであると記し、さらに、トロイア戦争の際にギリシア人がアジアに攻め入ったことが、ペルシア人の間にギリシア人に対する敵意を生じさせた発端となったと記し（第1巻4章）、異民族（バルバロイ）という言葉を用いつつも、そこにギリシア人の優位と異民族の劣位を示すような価値判断をすり込ませていない。二項対立的な思考法そのものはイオニアで発展したと言えるが、ギリシア人と異民族との対比にこの思考法を利用し、発展させたのは、主としてアテナイにおいてであり、そこにアテナイの体験したペルシア戦争の記憶が関わっていることは明らかであろう。そしてアテナイにおいてこのような言説が普及したのは、ペルシア戦争直後と言うよりもむしろ、ペロポ

---

14 ペルシア戦争後まもなく、アテナイにおいてはその年の戦没者をいた国葬が営まれるようになった。この国葬において、弁舌にすぐれた選ばれた人物が代表して弔辞を述べというのが習わしとなっていた。葬送演説や祭典演説においては、民族あるいはポリスの歴史、戦士の武勲が語られるのが一般的であった。

15 Gorgias fr. 5b = Philostr. V. S. I 9. ゴルギアスは前480年ころシチリアのレオンティノイに生まれ、前380年ころ死去したと推定されている。引用した演説がなされた時期については定かではないが、前427年には祖国レオンティノイの使節としてアテナイに赴いたことが知られている。またアテナイ滞在中には、アルキダマスやイソクラテスの師となった。引用された2つの演説は、演説の内容から、ペロポネソス戦争中（前431-404年）のものと考えられる。

16 Gorgias fr. 5b = Philostr. V. S. I 9.

ネソス戦争によって、ギリシア世界が戦争状態に陥ってから、とりわけペロポネソス戦争におけるアテナイとスパルタの対立に、ペルシア王および小アジア西部のサトラペスがあからさまに介入をはじめた前5世紀第4四半世紀に入ってからのことであったと思われる<sup>17</sup>。

### 3. 小アジアをめぐるアケメネス朝との攻防と異民族敵視、異民族蔑視の言説の普及

前412年にペルシア王がギリシア情勢への介入を決意し、アテナイとスパルタの対立を利用しながら、小アジア本土のギリシア諸市から貢租の徴収再開に向けて画策をはじめると、ペルシアの資金をあてにするグループとペルシアに対してあくまでも敵視することを唱えるグループとの間で、小アジアに住むギリシア人の処遇をめぐる攻防がはじまる。ペルシア戦争後、アテナイとスパルタの覇権争いが表面化すると、水面下では両ポリスによるペルシアの軍資金の援助をあてにしたペルシア王および小アジア西部のサトラペスへの接近が繰り返され試みられていた。しかしながら、軍資金の供与の条件に小アジアに住むギリシア人がペルシア王の配下におかれることという項目が加えられると、当該ポリスの思惑もからまって、国際的にも国内的にも論戦は熾烈をきわめることとなった<sup>18</sup>。この攻防は前386年の「大王の平和」によって収束をみた。小アジアに住むギリシア人はペルシア領に属すること、ペルシア王に貢租を納入すること、一方、島嶼およびギリシア本土に居住するギリシア人はペルシア王の支配からの自由が保障されること、が合意された。この間、アテナイ国内では、また有力ポリス同士、あるいは有力ポリスと当該ポリスとの間の外交交渉においては、ギリシア人の同胞をペルシア王に引き渡すか否かをめぐり、ペル

17 ここで図像についても触れておくべきかもしれない。前5世紀のアテナイにおいて異民族、あるいは異民族の習俗が陶器画にどのように描かれたかについては、Miller (1997) がある。ペルシア戦争の戦いの場面を描いた陶器画はマラトンの戦いからまもなく、前490年ころからみられるが、そこに描かれているのは単純なギリシア人の優位性と言うよりも勝者を英雄視して描くと言うことであった。

18 この間のアテナイ、スパルタ、ペルシア、および関連諸ポリスとの間の複雑な国際関係については、とりわけLewis (1977) 108-158を参照。Miller (1997) にも簡潔ながらわかりやすい概要が叙述されている。また、小アジア沿岸部のギリシアポリスからの反応については、師尾 (2004) 189-193, Sato (2006), Moroo (2014) 111-112を参照。アテナイ、スパルタによる軍資金獲得をめぐるペルシアへの使節派遣の状況については、師尾 (2000) 53頁を参照。



古代ギリシアにおける「他者」の発見と「他者」との境界をめぐる言説の展開—ヨーロッパという境界の策定の歴史的展開と近代における受容めぐって

シア戦争時の祖先の行動を引き合いに出しつつ、舌戦が繰り広げられた。

リュシアスは『コリントス戦争に斃れた戦士のための葬送演説』において、アテナイ人のペルシア戦争での体験について次のように述べる<sup>19</sup>。

彼ら（アテナイ人）のみが全ギリシアのために（ὕπερ ἀπάσης τῆς Ἑλλάδος）とてつもなく多勢のバルバロイに対して危険に身をさらしたのであった（2. 20）。

彼ら（アテナイ人）は富を得るために自分たちの土地の境界を越えて他人の地へと侵攻してきたバルバロイに対する戦勝記念碑を、ギリシアのために（ὕπερ τῆς Ἑλλάδος）自分たちの土地に建てた（2. 25）。

あるいはバルバロイに与してギリシアを隷属させるのか（ἢ μετα τῶν βαρβάρων γενομένουσ καταδουλώσασθαι τοὺς Ἕλληνας）（2. 33）

また、葬送演説を扱ったプラトンの『メネクセノス』においては、実際場で演説されたものではないが、「（アテナイ人は）ギリシアをバルバロイに渡して恥ずべき不埒な行為をおこなうことをよしとしなかった」（245e）と記している<sup>20</sup>。リュシアスの第2弁論においても、『メネクセノス』においても、バルバロイ、すなわちペルシア人は敵として位置づけられ、ギリシア人とペルシア人とが対比されている。

かかる言説は、現実の政治の場でも展開されていたようである。現存する公的なギリシア碑文の中であからさまにペルシア人を「バルバロイ」と称したものの初出は、前386年の「大王の平和」目前にアテナイ民会で決議されたと思われるエリュトライ出土の碑文断片である<sup>21</sup>。この碑文に現れる「エリュトライ人をバルバロイに渡さないことについて」（11-14行目）という句は、決議碑文としては極めて異例とも言える。というのも、ここで使われている「バルバロイ」という用語は、明らかにペルシア人を指しているのだが、一般にペルシア人を指すメディア人（*Médoi*）ではなくあえて「異民族」を指す一般名詞

19 リュシアスの第2弁論である『コリントス戦争に斃れた戦士のための葬送演説』が執筆された年代については、前386年の「大王の平和」の前か後かをめぐって諸説あるが、今日では前390年までには制作されていただろうと考える研究者の方が多い。また現実に演説された台本か、それとも習作かについても議論がある。Todd (2007) 157-164参照。

20 『メネクセノス』が書かれたのは、内容からして前386年の「大王の平和」以降であるが、正確な成立年代については不明である。

21 SEG 26. 1282 = RO 17.

である「バルバロイ」が使われているからである<sup>22</sup>。そして断片的ながら決議本文全体からうかがわれるように、敵対するものであることを強調するために「バルバロイ」という語が選択的に用いられているのである。

上述の同時代に書かれたリュシアスの第2弁論やプラトンの『メネクセノス』での用法との類似、さらにはイソクラテスの弁論および演説で繰り返されるアテナイの優位とギリシア人の優位についての言葉<sup>23</sup>との共通の方向性がみてとれよう。この時期、小アジアに居住するギリシア人をペルシア王に引き渡すことによってエーゲ海域の秩序と勢力均衡を図ろうとするグループに反対する人々が、意識的に「バルバロイ」という言葉を用いることによって、「バルバロイに対する戦い」としての過去のペルシア戦争と現状を結びつけ、ペルシア王に与しようとするかかるグループを糾弾しようとしている様子がみてとれる。「バルバロイ」という用語を使用することによって、過去の歴史と現在の歴史が重なり、「バルバロイ」に与する人々は恥ずべき人々と位置づけられ、「バルバロイ」と戦うことがペルシア戦争時の祖先のように英雄的かつなすべき姿であるとされたのである<sup>24</sup>。

---

22 同様に公的碑文においてペルシア人が「バルバロイ」と称された事例としては、通称「テオスの呪い」とよばれるテオス出土の碑文 ML 30, 23-27 (前470-450年ころ)がある。ただし、この碑文では、「バルバロイ」すなわちペルシア人は敵対する存在ではなく、単に「非ギリシア人」として語られている。また、前378/7年に決議された第二次海上同盟の協定では、「もし何人か、ペルシア王の支配下でない限りにおいて、ギリシア人であれ異民族(バルバロイ)であれ(ヨーロッパ)本土あるいは島嶼に居住する者がアテナイ人およびその同盟者の同盟者たらんと欲するならば、その者には自由かつ自治が保障されること」と記され、「バルバロイ」の語はペルシア人ではなく、ヨーロッパに住む異民族に対して用いられている(*IG II<sup>2</sup>* 43=RO 22, 15-20)。そして前325/4年に成立したアドリア海植民に関する決議では、「ギリシア人であれ異民族(バルバロイ)であれ海を航行する者は」と記され、ここでもバルバロイという言葉は単に「非ギリシア人」を指し示す言葉として使われている(*IG II<sup>2</sup>* 1629, 226-228 = *IG II<sup>3</sup>* 1 370, 57-59)。

23 イソクラテスをはじめとする前4世紀のアテナイにおけるアテナイの優位と異民族蔑視の思想の展開については、庄子(2004)200-201を参照。

24 ギリシア人と異民族との戦争を振りかえるという手法は、前5世紀後半および前4世紀の葬送演説や祭典演説で使われ、その後演説における一つのスタイルとして定着していった。トロイア戦争とペルシア戦争は、ギリシア人のもっとも誇るべき戦争に位置づけられた。イソクラテスの『パンアテナイア祭典演説』においては、トロイア戦争はギリシア人とバルバロイとの敵対関係の始まりとされた(12. 42)。また『民族祭典演説』においては、アテナイによる植民運動が取り上げられ、アテナイが植民者を送り、バルバロイの地を征服して小アジア本土および島嶼にポリスを建設したことで、苦境にあった人々を救ったと述べられている(4. 34-35)。

#### 4. 異民族=敵としてのマケドニアという言説

トロイア戦争およびペルシア戦争を見本につくられたギリシア人对異民族という二項対立的論法による外部の敵に対する攻撃は、マケドニアが台頭してくると、敵としての異民族の意味合いが異なってくる。一方では、ギリシアとマケドニアによるいわば「ヨーロッパ連合」をつくり、真の敵たるアジアの王、ペルシア王に立ち向かうべきだとするイソクラテスのような考えを有する知識人が存在した。他方、マケドニア自体を「非ギリシア人」の異民族として、バルバロイと称し、あからさまに敵対感情を示す人々も存在した。後者の急先鋒となったのがデモステネスである。

デモステネスは対マケドニア戦を訴えるにあたり、しばしばマケドニア王フィリポス2世についてバルバロス（バルバロイの単数形）と呼んでいる<sup>25</sup>。フィリポス2世が、現実にはギリシアの重要な祭典に参加し、さらには主催していることからしても、デモステネスのこうした見方がギリシア世界一般のものであったとは言いがたい。相手を敵視し、おとしめるレトリックとして「バルバロイ」という表現が使われたと考えられる<sup>26</sup>。

#### 5. アレクサンドロスによるギリシア人と非ギリシア人の区別

前334年にアレクサンドロス大王率いるマケドニア＝ギリシア軍が小アジアに入ると、アケメネス朝の支配下におかれていたポリスを次々に解放していった。多くのポリスでこの「解放」は歓迎されたが、ポリスによっては、いやおそらく多くのポリスにおいては、解放を求めるグループとアケメネス朝にとどまることを望むグループとの間で方針をめぐって激しい政争が起こったらしい。前334年の解放に際して、アレクサンドロスがキオス人に宛てた書簡を刻んだ碑文の断片が現存している。これによると、アレクサンドロス軍の来寇に際して、キオス国内では内乱状態に陥っていたことがわかる。

ポリスをバルバロイに売り渡した者のうち、すでに逃走した者については、ギリシア人の決議に従って、平和を共有するすべてのポリスから追放され、逮捕があること<sup>27</sup>。

---

25 Dem. 3. 17; 3. 24; 19. 305; 19. 308; 19. 327など。

26 マケドニア人のアイデンティティに関するギリシア人の認識と現実のマケドニア-ギリシア関係との複雑な関係については、澤田(2010)を参照。

27 SIG 283 = RO 84a, 10-13.

残りのキオス人のいかなる者もバルバロイに与した廉（ἐπι βαρβαρισμῶι）のゆえに裁判に付されることはないこと。キオスに居住する他のいかなる者（*paroikoi*）も同様であること<sup>28</sup>。

ペルシア軍をさし示す言葉としてバルバロイが用いられていることが目をひくが、それ以上に、前5世紀前半まで使われていたメディスモス（*mêdismos*）ではなく *barbarismos* という言葉を使っていることが注目される。少なくともこの碑文においては、アレクサンドロスのペルシアに対する敵愾心と同時に、ペルシア軍とマケドニア＝ギリシア軍にはさまれ内戦状態になっていたキオスの住民に対して、逃亡すらしなければ、ペルシア側についた者に対しても罪を問わずに融合をはかろうとしているさまが見てとれる。

一方、同じアレクサンドロスがプリエネ人に宛てた手紙には補いではあるが次のようなくだりがある。

ナウロコンに居住する者のうち、ギリシア人については自治が認められ自由であること。…一方、…およびミュロ…およびP…とその関連の地については、私の所有とみなす。これらの村に居住する者たちは貢税を支払うこと<sup>29</sup>。

新しく提案されたこの読みにしたがうならば、アレクサンドロスは小アジア本土のポリス、プリエネの住民について、ギリシア人からは徴税をおこなわず、非ギリシア系住民からは徴税をおこなうという、ギリシア人が非ギリシア人かということによって政策を異にしていることがわかる。ギリシア人であるということは、自由を保障される存在であり、一方、そうでない人々にはそれが保障されないのである。

---

28 SEG 22. 506 = RO 84b, 8-10.

29 *Die Inschriften von Priene* (Bonn 2014) Nr. 1, 2-4, 9-13. 「ギリシア人」という補いを含む新しい補いによるテキストは、Thonemann (2013) にもとづくものである。原文：τῶν ἐν Ναυλόχοι κ[ατοικούν]των ὅσοι μὲν εἰσι[ν Ἑλλενε]ς, αὐτο[ν]όμους εἶναι κα[ὶ ἐλευθ]έρους…… τὸ δὲ [...c. 5..] καὶ Μυρο[--c. 5-9] [κ]αὶ Π[...c. 3 καὶ τὴν προσοῦσαν] χώρα[γ]ινώσκω ἐμὴν εἶναι, τοὺς δὲ κα[τοικοῦν]τας ἐν ταῖς κώμαις ταύ[ταις] φέρειν τοὺς φόρους.

## 6. ヘレニズム時代：ギリシア人の領域の拡大とバルバロイの領域の遠隔化

アレクサンドロスによるアケメネス朝の壊滅（あるいは乗っ取り）によって、ギリシア人＝マケドニア世界は、大きくその領域をアジアに拡大することになった。ヨーロッパ、あるいはギリシアという地理的区分ではなく、先のヘロドトスによるギリシア・アイデンティティの4つの要素が、いわばギリシア人かそうでないかを見分ける唯一の基準になった。

同時代の文献史料の乏しい前3世紀にあって、敵対的な意味で「バルバロイ」という用語を用いた碑文がいくつか出現する。「バルバロイ」と呼ばれた1つはケルト人（ガラティア人）で、もう1つはマケドニア人、とくにマケドニア王である。

### 6-1 敵としてのケルト人

リュシマコスとセレウコス1世が小アジアにおいて勢力争いを繰りひろげていたとき、前281年にケルト人がバルカン半島を南下してマケドニアに侵入してきた。両王が死去し、さらにリュシマコスを継いだプトレマイオス・ケラウノスが前279年に死去すると、ケルト人の勢いは増し、さらに南下をはじめた。しかしながら彼らの攻撃はアイトリア同盟の軍によってデルフォイで食い止められた。この勝利を記念して、その後デルフォイにはソーテーリア（救済）祭が創設され、ギリシア人の祭典として認められることとなった。このソーテーリア祭の認可に関する決議には次のように書かれている。

（アイトリア同盟が）ギリシア人とギリシア人の共通の聖域であるアポロン神殿を攻撃したバルバロイ（ケルト人）に対して戦われた戦闘を記念して、ゼウス・ソーテールとアポロン・ピュティオスのためにソーテーリア祭を開催することを決議した<sup>30</sup>。

さらに、このケルト人の撃退にちなんでアテナイがマケドニア王アンティゴノス・ゴナタスを顕彰していたことも知られている。アスクレピアデスの息子ヘラクレイトスを顕彰した決議には次のようなくだりがある。

---

30 IG II<sup>2</sup> 680 = IG II<sup>3</sup> 1 1005, 7-11. 前250/49年のアテナイの民会決議である。ソーテーリア祭の創設については、Chaniotis (2005), Strobel (1994) を参照。また、ヘレニズム・ローマ時代のケルト人認識をめぐる問題については、Coçkun (2013) を参照。

デーモスが宗教儀礼およびパンアテナイア祭の競技祭を復興したとき、彼（ヘラクレス）は競技場（スタディオン）を整備して立派にし、アテナ・ニケ女神にギリシア人の安寧のためにバルバロイ（ケルト人）に対して王（アンティゴノス・ゴナタス）によって成し遂げられた事績を記録した書板を奉納した<sup>31</sup>。

ここでは、敵たるバルバロイとされているのはケルト人であり、マケドニア王はギリシア人の安寧のために行動したことによって賞賛されているのである。ヘレニズム時代になると、「バルバロイ」として自分たちとは異なる存在として語られるのは、ヘレニズム世界の外に居住するケルト人へと変わっていったことが見てとれる。ケルト人をバルバロイと称した決議碑文は、上記の碑文以外にも複数知られている。その多くがこの前270年代初めの侵入に関係している。さらに前2世紀の侵入に際しても、ケルト人をバルバロイと称した碑文が出土している。ヘレニズム時代、ギリシア人の世界の外側に生活していたケルト人が、ギリシア人社会と敵対関係に陥るたびに、境界の外にいるバルバロイとして脅威と蔑視の対象とされた。

## 6-2 敵としてのマケドニア人再度

一方、これに先立つクレモニデス戦争においては、マケドニア王アンティゴノス・ゴナタスは敵とされ、プトレマイオス・フィラデルフォスの援助を受けたスパルタとアテナイの連合軍と戦いを交えた。アテナイ・スパルタ連合軍は敗北したが、その後、クレモニデス戦争の開戦の端緒となった「クレモニデス決議」の提案者クレモニデスの兄弟であるグラウコンが、ギリシア同盟によって顕彰されたことがあった。プラタイアで発見されたこの顕彰決議においては、アンティゴノス・ゴナタス治下のマケドニアは「バルバロイ」と明言された<sup>32</sup>。

マケドニアがふたたび「バルバロイ」として敵対視されるときに、それを正当化する仕

31 *IG II<sup>2</sup> 677 = IG II<sup>3</sup> 1 1034, 1-6*. 決議年代については諸説あるが、近年は一般に前250/49年ころと考えられている。

32 *BCH 99 (1975), SEG 36. 443, 40. 412, 21-22*. この決議と「クレモニデス決議」およびトロイゼンで発見されたいわゆる「テミストクレスの決議」との類似性については、さしあたり、Étienne and Piérart (1975), Robertson (1982), Jung (2006), Knoepfler (2010), Wallace (2011) を参照。この時代のギリシア世界における過去の記憶の掘り起こしと新たな記憶の創造をめぐる問題については、別稿で論じたい。2014年4月、第3回 Japan-Euro Colloquium (Athens) において、'Transformation and Re-Creation of Memory through the Ages: Local Pride and the Rendering of the Persian Wars' というタイトルで口頭報告をおこなっている。



古代ギリシアにおける「他者」の発見と「他者」との境界をめぐる言説の展開—ヨーロッパという境界の策定の歴史的展開と近代における受容をめぐって

掛けとして使われたのが、ペルシア戦争の記憶の呼び起こしであった。「クレモニデス決議」において、アテナイとスパルタが同盟を締結し、マケドニアに対して戦争を挑むに際して、この行動が前5世紀初めのペルシア戦争時におけるアテナイとスパルタがともに参加したギリシア連合を彷彿とさせる言葉が意図的に連ねられたのである。アテナイとスパルタの同盟軍は「ギリシア人の共通の自由のために」(18行目)、「諸市を隷属させようとする者たちに対して戦いを挑んだ」(7-13行目)のであった<sup>33</sup>。

## 7. 戦争を契機に再生される異民族蔑視の思想と異民族敵視の思想

これまでみてきたように、異民族蔑視の思想は、ペルシア戦争後しばらくたってから、主としてアテナイで発展した。こうした思想はしかしながら、たえず普遍的なものとして存在したのではなく、その時々周辺の世界との関係によって、前面に押し出されたり、あるいは隠されたりした。「バルバロイ」として敵視される対象は、前4世紀初頭まではほぼペルシア人に限定されていたが、マケドニアの台頭とともに、時としてマケドニアに対して用いられることもでてきた。しかしながら、いずれにせよ、こうした異民族蔑視の言葉が使われるのは、直接的に何らかの敵対関係が生じたときであり、そして外部に対してと言うよりも、内部の人間を説得させる、納得させる一種のプロパガンダ用語として使われていたように思われる。前3世紀半ばの事例にみられたように、敵対関係が入れ替われば、バルバロスとされた人物が顕彰されることすら、めずらしいことではなかったのである。

## 8. むすびにかえて EU の拡大・EU の境界 - 異民族蔑視, 異民族排除の境界は再び生ずるのか?

むすびにかえて、EU の形成と拡大の歴史を概観して、境界の問題を現在に移しかえて考えたい。

第二次世界大戦終結後まもなく、ヨーロッパでは経済統合にむけた折衝が始まり、1948年には欧州経済協力機構が誕生することになった。欧州統合に向けた最初の具体的な機関となったのは、1950年のシューマン宣言にもとづいて設立された欧州石炭鉄鋼共同体で

---

33 「クレモニデス決議」は前269/8年に成立した。IG II<sup>2</sup> 686 + 687 Add.= SIG 434/5 = IG II<sup>3</sup> 1 912.

あった。1958年には欧州経済共同体（EEC）と欧州原子力共同体とが発足し、さらに1965年のブリュッセル条約によって1967年に欧州諸共同体（EC）の中にこれら3つの共同体がおかれるようになり、これがヨーロッパ共同体の基礎となった。ECは西欧の6カ国（フランス、西ドイツ、イタリア、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ）から出発したが、1973年にはイギリス、アイルランド、デンマークが加わって9カ国となり、1981年にギリシア、1986年にスペインとポルトガルと南欧諸国が加わり12カ国に拡大した。

1989年にベルリンの壁が崩壊し、翌1990年に東西ドイツが統一されると、1992年には上記12カ国による欧州連合すなわちEUが発足した。

当初、東西冷戦体制下にあつて、西側ヨーロッパの東側に対する対抗勢力と位置づけられていたEUは、冷戦体制の終息によって旧東側諸国をも取り込んだ形での勢力拡大の模索をはじめた。こうして、EUは名実ともに「ヨーロッパ」連合としての歩みをはじめることになったのである。1995年にオーストリア、スウェーデン、フィンランドが加盟して15カ国となったEUは、2004年には旧東側諸国をふくむ10カ国（ポーランド、チェコ、ハンガリー、スロヴァキア、スロヴェニア、ラトヴィア、エストニア、リトアニア、マルタ、キプロス）を一気に迎え入れ、EUのこの政策転換は明確になった。

EUの拡大はつづき、2007年にはルーマニアとブルガリアを、2013年にクロアチアの加盟をみとめて、2015年現在、EUは28カ国で構成されている。現在、アルバニア、セルビア、モンテネグロ、マケドニア旧ユーゴスラヴィア共和国、トルコがEU加盟候補国として加盟に向けた交渉をはじめており、ボスニア・ヘルツェゴヴィナとコソヴォがその後の候補国として名を連ねている<sup>34</sup>。

当面EU加盟への拒否ないし加盟についての協議の凍結を表明しているノルウェー、アイスランド、スイスの3国とモナコやサン・マリノ、ヴァチカンなどの小国をのぞけば、これによってEUは、地理的にヨーロッパに属するすべての国々を包括することになるのであり、文字通り欧州連合と称される共同体へと拡大してきたと言える<sup>35</sup>。EUとEU域外の地域との境界線は、今ふたたびヨーロッパとアジア、ヨーロッパとアフリカとの境界線にほぼ重なるものとなり、東はロシア、そして南東は中東、南はアフリカに引かれることとなった。経済協力という点で言えば、2003年に提唱された拡大ヨーロッパ政策（Wider Europe Programme）によって、これら近隣諸国とのあいだには経済協力関係が築かれて

34 EU公式ホームページ（[http://europa.eu/about-eu/countries/index\\_en.htm#goto\\_2](http://europa.eu/about-eu/countries/index_en.htm#goto_2) 2016年1月8日最終閲覧日）による。

35 ベラルーシ、モルドヴァ、ウクライナなど、国土の一部が地理的区分上ヨーロッパとなる領域をもつ旧ソ連の国々のはのぞいている。

古代ギリシアにおける「他者」の発見と「他者」との境界をめぐる言説の展開—ヨーロッパという境界の策定の歴史的展開と近代における受容めぐって

いる。2005年には欧州近隣政策（European Neighbourhood Policy）も発表された。しかしながら、冷戦体制崩壊後の1993年に発表された加盟要件に関するコペンハーゲン基準は、地理的にヨーロッパに属していることをEUへの参加要件として定めた。それは古代ギリシア以来のヨーロッパ・アジア・アフリカという地理的区分とその境界としての役割を再認識させるものともなったのである。

EUの構成国、あるいはヨーロッパ諸国は、言語も民族もさまざまであり、1つの突出した国が全体を束ねているわけでもない。もともと旧ソ連を中心とする東側勢力に対抗するために組織化されていったEUは、その対抗勢力を失うと、いよいよ「ヨーロッパ」という枠組みでその加盟国を拡大し、EUとEU域外の世界との境界を「ヨーロッパ」と「非ヨーロッパ」という形で定めていった。そしてそれが、経済や政治の制度や枠組みだけでなく、地理的区分にとどまらない「ヨーロッパ」というアイデンティティを文化的にも明確に創出することを推し進めることにもなったのである。今やEUは「ヨーロッパ」の代用語となり、「ヨーロッパ」はEUを指し示すものとなったと言ってよい。その一方で、北アフリカおよび中東からの移民・難民の流入に対して、EUは門戸を広げておけるのか、それとも一部にすでに存するようにEUという壁をもって閉ざしていくのか。歴史状況によって境界が変化することを、ヨーロッパはその歴史の中でいやと言うほど体験してきた。EUの拡大の最後の到達点をEUはどのように考えているのか。古代ギリシア人の多様に変化してきた境界に関する議論、「他者」に対する議論は、今なお何らかの指標を与えてくれるのではなからうか。

## 文献略記

IG *Inscriptiones Graecae*.

LSJ Liddel, H.G./ Scott, R./ Jones, H.S./ McKenzie, R. *Greek-English Lexicon*. 9<sup>th</sup> edition. Oxford 1996.

ML Meiggs, R and D.M.Lewis, *A Selection of Greek Historical Inscriptions*. 2<sup>nd</sup> ed. Oxford 1988.

RO Rhodes, P. J and R. Osborne, *Greek Historical Inscriptions 404-323 BC*. Oxford 2007.

SEG *Supplementum Epigraphicum Graecum*. Leiden 1925-.

SIG Dittenberger, W. *Sylloge Inscriptionum Graecum*. 3<sup>rd</sup> ed. Leipzig 1915-24.

参考文献

- Chanotis, A. (2005) *War in the Hellenistic World*. Malden MA.
- Coşkun, A. (2013) 'The Galatians in the Graeco-Roman World.' In: Ager, S.L. and R.A. Faber (eds.) *Belonging and Isolation in the Hellenistic World*. Toronto, 73-95.
- Étienne, R. and M. Piérart (1975) 'Un décret du koinon des Hellènes à Platées en l'honneur de Glaucon, fils d'Étéoclès, d'Athènes'. *BCH* 99: 51-75.
- Gehrke, H.-J. (2000) 'Gegenbild und Selbstbild. Das europäische Iran-Bild zwischen Griechen und Mullarhs.' In: Hölscher, T. *Gegenwelten. Zu den Kulturen Griechenlands und Rom in der Antike*. Leipzig, 85-109.
- Georges, P. (1994) *Barbarian Asia and the Greek Experience: From the Archaic Period to the Age of Xenophon*. Baltimore.
- Goldhill, S. (1988) 'Battle Narrative and Politics in Aeschylus' Persae'. *JHS* 108: 182-193.
- Gruen, E.S. (2011) *Rethinking the Other in Antiquity*. Princeton NJ.
- Hall, E. (1989) *Inventing the Barbarian: Greek Self-definition through Tragedy*. Oxford.
- Hall, J.M. (2002) *Hellenicity between Ethnicity and Culture*. Chicago.
- Harrison, T. (ed.) (2002) *Greeks and Barbarians*. Edinburgh.
- Griffith, M. (1988) 'The King and the Eye. The Rule of the Father in Greek Tragedy'. *PCPS* 44: 20-84.
- Jung, M. (2006) *Marathon und Plataiai: Zwei Perserschrachten als "lieux de mémorire" im antiken Griechenland*. Göttingen.
- Knoepfler, D. (2010) 'Les Viellards relégués à Salamine survivront-ils au jubilé de la publication du décret de Thémistocle trouvé à Trézène?'. *CRAI* 2010: 1181-1233.
- Miller, M.C. (1997) *Athens and Persians in the Fifth Century BC*. Cambridge.
- Lewis, D.M. (1977) *Sparta and Persia*. Leiden.
- Mitchell, L. (2007) *Panhellenism and the Barbarian in Archaic and Classical Greece*. Wales.
- Moroo, A. (2014) 'The Erythrai Decrees Reconsidered: IG I<sup>3</sup> 14, 15 & 16'. In: Matthaiou, A.P. and R.K. Pitt eds. *Αθηναίων επίσκοπος. Studies in honour of Harold B. Mattingly*. Athens, 97-119.
- Robertson, N. (1982) 'The Decree of Themistocles in its Contemporary Setting'. *Phoenix* 36: 1-44.
- Said, E.W. (1978) *Orientalism*. New York. エドワード・E・サイード『オリエンタリズム』

古代ギリシアにおける「他者」の発見と「他者」との境界をめぐる言説の展開—ヨーロッパという境界の策定の歴史的展開と近代における受容をめぐって

平凡社, 1986年。

Sato, N. (2006) 'Athens, Persia, Clazomenae, Erythrae: an Analysis of International Relationships in Asia Minor at the Beginning of the Fourth Century BCE'. *BICS* 49: 23-37.

Strobel, K. (1994) 'Keltensieg und Galatersieger.' In: Schwertheim, E. ed. *Forschungen in Galatien*, 67-96.

Thonemann, P. (2013) 'Alexander, Priene and Naulochon.' In: Martzavou, P. and N. Papazarkadas eds. *Epigraphical Approaches to the Post-Classical Polis*. Oxford, 23-36.

Todd, S. C. (2007) *A Commentary on Lysias. Speeches 1-11*. Oxford.

Wallace, S. (2011) 'The Significance of Plataia for Greek Eleutheria in the Early Hellenistic Period'. In: A. Erskine, L. Llewellyn-Jones eds. *Creating a Hellenistic World*. Swansea, 147-176

岡田泰介 (2008) 『東地中海世界のなかの古代ギリシア』(世界史リブレット) 山川出版社。

澤田典子 (2010) 「前五 - 四世紀のマケドニアとギリシア世界」桜井万里子・師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム』山川出版社, 77-108頁。

庄子大亮 (2004) 「古代の言説とヨーロッパ・アイデンティティ—古代ギリシアにおける「他者」の言説—」『人文地の新たな統合に向けて: 21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第2回報告書』京都大学大学院文学研究科21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」183-209頁。

周藤芳幸 (2006) 『古代ギリシア 地中海への展開』京都大学学術出版会。

師尾晶子 (1999) 「アルカイック期僭主政をどうとらえるか」『千葉商大紀要』37-3, 49-68頁。

師尾晶子 (2000) 「ギリシア世界の展開と東方世界」『古代地中海世界の統一と変容』青木書店, 24-55頁。

師尾晶子 (2004) 「アテナイとイアソス: 前412-394年-IG II<sup>2</sup> 3の再構成」『千葉商大紀要』42-3, 171-195頁。